

百田尚樹 著
『永遠の0』

(講談社)
913
H59
2

誰でも日によってやる気があったりなかったりする。他人を思いやるより自分の価値観からはみ出さず生きるほうが簡単かもしれない。でも、それではない。この本を読んでからは自分自身に言い聞かすようにしている(気分屋で自己中なところはなかなか治らないが)。物語の主人公健太郎の祖母は、祖父と結婚する前に結婚していた男がいた。その男は太平洋戦争において戦死した特攻隊員であり、健太郎にとっては実の祖父にあたる人であった。それを知った健太郎は、取材というかたちで戦争体験者、元特攻隊員を訪ね、実の祖父「宮部」にまつわる話を聞き、しだいにどんな人物だったのか知っていく。宮部は一流と評される戦闘機操縦技術を持ちながらも、「絶対に死なずに帰る」と日本に残る妻と約束し、敵を撃墜することよりも自分の命を守り、死を避ける事を第一に考えて戦った。し

かし、その男が終戦間際に特攻隊で戦死してしまう。特攻隊は当時、自ら志願するものであつた。自分の命を守ることに必死だった男がなぜ特攻隊員に志願することになったのか。多くの語りが最後につな

読書案内

がり、戦争の時代の悲劇を描きながらも、その中から浮かんできく宮部という人物の輝きがとても見事。北野生にも自分以外の誰か、何かを「大切にする」「想う」ということについてじっくり考えてみてほしいなと思う。読み終えると叱咤激励されたような衝撃が残り、奮い立たせてくれるような本。ぜひ、おすすめです。

梨木香歩著
『鳥と雲と薬草袋』

(新潮社)
914
N31
1

人はいつから暇を「つぶす」ようになったのだろうか。私も昔は電車の中で単語帳を開いたりしていたが、いつのころから暇を「暇」のまま楽しもうと

思うようになった。今では通勤のとき(80分ほど)、ほとんど考えごとをしている。私の理想的な考えごととは、例えば「鳥と雲と薬草袋」のような考えごとができれば素敵である。この本は著者が日本の地名について自由に思いを馳せたエッセーである。風早島、由良、日向、椿泊、長者原、月ヶ瀬など、日本には素敵な地名がたくさんある(中には市町村の合併などでなくなってしまった地名もあり残念である)。単にそれらの地名の由来を説明しているわけではない。「さきへ、さきへと岬の

先端まで辿り着いて、(中略)人は、そこからどこを目指すのか。」「(佐田岬)と我々の行く末を案じてみたり、「血なまぐさい戦いのあつたその昔もまた、(中略)月は静かに昇っていただろ。」「(月出峠)と古の風景を想像してみたり……。タイトルの「薬草袋」という名のとおり、読むとなんとなくほつとする。本の装丁も雰囲気があつて気に入っている。さて、実際の私の考えごとといえば：「今日のおやつは何を食べようか。」まだまだ理想とは程遠い。梨木ワールドが気に入った人には、著者が身の周りのこと

について語った『ぐるりのこと』(新潮社)もおすすめである。

J. D. サリンジャー著
『キャッチャー・イン・ザ・ライ』
(白水社)
933
S24
1

高校生の時を振り返ってみると、なかなか面白い。今になってみると少し遠くから見つめることができることが、すべて死活問題のようであった。『キャッチャー・イン・ザ・ライ』はそういった青年の葛藤を実にリアルに描き出している。この作品は学校を退くことになったホールデンが、ニューヨークを放浪した三日間の記録であるが、その旅の中でホールデンはあらゆる物事を彼の基準で見極めてゆく。インチキ(phony)に感じたものを軽蔑し、純粋なものに心を寄せる。これは彼の「純粋なもの志向」というプレゼンスによるものではあるが、その裏には自分自身への全幅の信頼が垣間見える。タイトルである「キャッチャー・イン・ザ・ライ」はロバート・バーンズの詩の一節(If a body meet a body

comin, through the rye)を主人公が間違えて(If a body catch a body comin, through the rye)と覚えたものから取ったものである。ライ麦は背が高く、ライ麦畑は男女が逢引する恰好の場なのである。もとの詩では男女の逢引が歌われているのだが、

ホールデンはこれを男女の逢引を押しとどめるものにとったように、そこに共感し、自分をこの詩の「ライ麦畑の捕まえ手」と同一視させたのである。皆さんもこういう経験はないだろうか。自分の価値観を信じ、自分の目に映るあらゆるものに適応させていく。これはなんだか青年期・少年期に共通するあり方のように思える。懐古と自戒の念を込めて本書を読み返したいものである。



石川九楊 著

①『日本の文字』

(ちくま新書)

810 18 3

②『縦に書け!』

(祥伝社新書)

810 18 4

(①) 近年、ヨコ書きが主流となつて、「ヨコ書きで日本語をなめらかに書いていると、ひらがなが体裁を整えなくなるから、書字のスピードにブレーキをかけるために、あえて筆記具の持ち方を変えて」「筆致がなめらかになることを防ぐ」(①)のが前述の持ち方であるようだ。

「縦に書いてこそ日本語」

(②)と著者は言う。また、「日本人の心が荒廃してきたことと、縦書きが忘れられてきたこととは、決して無関係とは考えられません」(②)とも言う。年寄りが愚痴を言っているのではない。「書の達人」の舌鋒鋭い論を読んで、あなたも(私も)縦書きで「書く」練習をしよう。

桜井進・坂口博樹著

『音楽と数学の交差』

(大月書店)

960 S14 1

大学在学中、音楽好きな数
学研究者にどれ程出遭つたであ
ろう。この本を読むと、数学者
や科学者が音楽に魅了される理
由が証明できるのではないかと

思つてしまう。

古代ギリシア人は、耳には聞こえない人間の内なる小宇宙(ミクロコスモス)の音楽と、それにつながる人間の外側に果てしなく広がる大宇宙(マクロコスモス)の音楽を音楽の本質と考えた。彼らは、現代人よりも数学と音楽の同一性を感じており、それらを美を極める調和の学として捉えていた。そして、音楽を数論(算術)、幾何学、天文学と並び数の比を扱う分野として4大科目の中に位置づけた。協和する音と音の関係がシンプルな比の関係にあることを発見したのも、「万物の根源は数なり」と唱えたピタゴラスである。

視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感とは、外界の物理的あるいは化学的な状態や変化を感覚器官が受け取り、脳が反応して私たちに認識できる感覚を作りだしている。音楽も数学も、人間の感覚や抽象世界を扱いそれらを表現するものであると筆者は述べている。

高校の授業で習う数列や対数なども登場する。音楽を数学で考え、数学を音楽で味わうことのできる一冊である。日頃意識していない音楽と数学の共通

部分に再び目を向けることで、人間の理性・知性・感性に磨きをかけることが出来るのではないだろうか。

小泉吉宏著

『ブッタとシッタカブッタ』

(メディアファクトリー)

726 K12 1 3

「とりあえず、これ読んでみたら?」と友人に手渡された一冊の本。

当時の口癖は「凹むわー」でした。とりあえず何に対してもすぐに出る言葉は「凹む」。今思うと、いろんなことに關して自信がもてなかった時期だったのでしょう。それが大学2回生の時でした。「周りからどう思われているのだろう」とか「自分は何でこんなこともできないのだろう」と不安でいっぱいになり、自己肯定はもちろんできず、自分の存在意義について考えることがしばしばありました。「自分の居場所はあるのかな?」、「自分にとって必要なのだろうか?」と常

読書案内

に自問自答していた気がします。

それに気づいた友人がこの本を貸してくれました。というよりも、半ば強制的に押し付けられた本でした。読むのは正直面倒くさいなと思いましたが、信頼していた友人だったので、何か意図があるのだろうと思い、ベッドで横になりながら軽い気持ちで読み始めました。

結論から言うと、あつという間に読めてしまいました。そして、今まで悩んでいた気持ちが一瞬馬鹿馬鹿しく感じました。私が単純なだけかもしれませんが、ものの見方を変えるだけで楽になれる自分があることに気が付けた瞬間でした。と同時に、自分の浅はかさが急に恥ずかしくなつてしまいました。それこそ穴があつたら入りたいくらい、自分の器の小ささに笑えました。

仏教の思想を4コマ漫画にした気軽に読める本です。かわい
いブタさんが思いっきり悩み、奮闘する姿が微笑ましい。何か最近人間関係しんどいなと思われた方は是非!